

硝子と職人

想いを伝える
それぞれの硝子づくり

試行錯誤を楽しいと思うから
美しいかたちの器を
つくれるようになった。



ガラスとの出会いは15歳のころ、就職先として紹介されたのがきっかけだった。それまでは単調な印象だった職人仕事が、北洋硝子のガラスづくりをみて一転、生き生きと楽しそうに感じられたという。

「ガラスをつくっていていちばん嬉しいのは、器が思い通りつくれたとき」。彼がつくる器はどこか優雅だ。厚みが等しく美しいかたちは、本当に手仕事から生まれたのかと不思議になるくらい、どれも同じように揃っている。ガラスを導くカンが鋭く、デザイナーからのオーダーに応えるのが得意だ。彼自身は自分の長所について、「試行錯誤を楽しめる心」だと言う。失敗を恐れず何度も繰り返すことを楽しめたからこそ、厳しい職人の世界でも技を磨き上げることが出来た。

もともとは偶然出会った仕事。でもいまでは生涯続けていきたいと思える道。少し前に卒業アルバムを見返したとき、将来の夢に面白い一言を見つけた。「職人になりたい」その夢は叶い、これからも続いていく。

